

能楽多岐「祝儀会」
友枝 昭世

ユネスコによる
人類の無形文化遺産「能楽」

第四十回

納涼能

能楽多岐「祝儀会」
友枝 昭世

平成29年7月21日(金)
開場 午後1時 開演 午後2時

会場 **国立能楽堂**
主催/公益社団法人能楽協会 東京支部

御挨拶

納涼能は昭和五十三年、オフィス街の本格的な演能公演として日比谷公会堂で産声を上げました。その後平成十年より、都内の主な能楽堂で能楽鑑賞始めの一步を踏み入れて頂く様になりました。今回で第四十回を迎えます。これもひとえに皆様の御支援の賜物と厚く御礼申し上げます。今回も東京支部ならではの企画で、シテ方五流総出演、豪華な曲目を用意しており能楽ファン必見のプログラムです。夏の暑い時期ですが能楽堂にお運び頂き、御高覧賜ります様お願い申し上げます。

東京支部長 朝倉 俊樹

【チケット料金】(税込) **全席指定**

S席	10,000円	C席	5,000円
A席	8,000円	D席	4,000円
B席	6,000円		

※各座席区分は前ページ座席表をご参照下さい。
※本公演は未成年児のご入場をご遠慮頂いております。

【チケット発売開始日】
4月21日(金) 午前10時より

【チケット取り扱い】 ※販売は下記に限り承ります。

- ◆ 電話
チケットスペース ▶ 03-3234-9999 (有人対応)
- ◆ インターネット
E+プラス ▶ <http://eplus.jp/> (PC・携帯共通)
- ◆ 店頭
国立能楽堂 ▶ 窓口販売
E+プラス ▶ ファミリーマート全国各店舗 店内famiポート

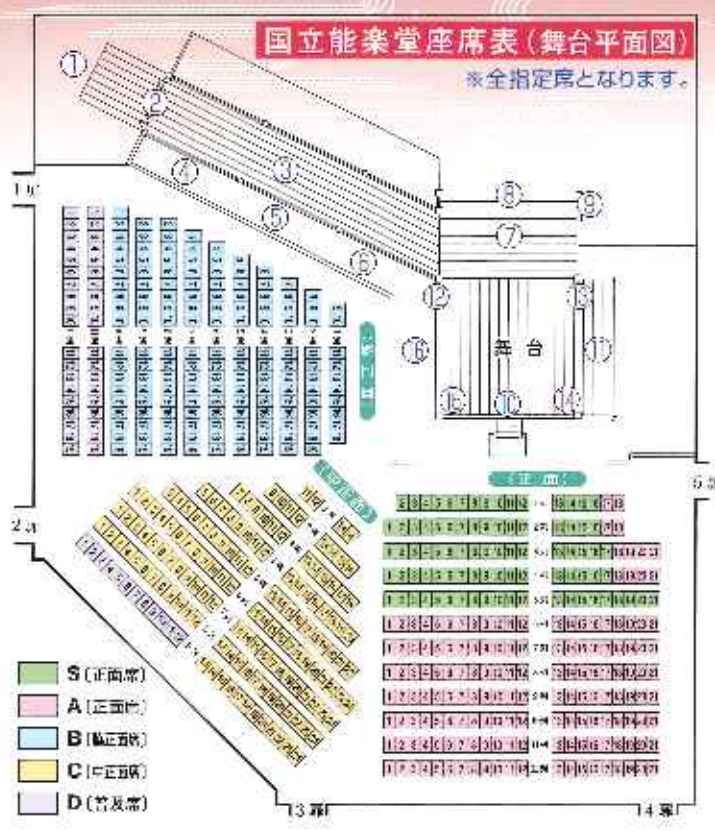
【前売チケット発売期間】 4月21日(金)～7月18日(火)
※チケットスペースのみ7月12日(日)に終了いたします。
※前売チケットは最長期間終了後、先着順で完売いたします。予めご了承ください。

【当日券】 国立能楽堂ロビー受付にて 午後1時より 販売開始
※残高がある場合のみ販売いたします。



【最寄駅】 JR(中央・総武線)千駄ヶ谷駅下車……徒歩5分
都営地下鉄(大江戸線)国立競技場駅下車……徒歩5分
東京メトロ副都心線 北参道駅下車……徒歩7分

◆公演に関する問い合わせ ◆チケットの取寄受付は致しませんので予めご了承ください。
公益社団法人能楽協会 東京支部 ☎03-5925-3871 / <http://www.nohgaku.or.jp/>



■ 舞台平面図

①鏡の間	②揚幕	③橋掛り	④三の松
⑤二の松	⑥一の松	⑦後座	⑧鏡板
⑨切戸口	⑩障子	⑪地謡座	⑫シテ柱
⑬笛柱	⑭ワキ柱	⑮目付柱	⑯白州

能楽堂とは
能を上演する専用の舞台を能舞台といひ、四本の柱に囲まれた三間(約6m四方の本舞台)を中心として、右側に地謡座、正面奥に後座と松の描かれた鏡板をもち、左側に長さ四間ほどの橋掛りを備えた独特な形をしています。
この能舞台は、元々屋外にあり、野天の白州や対面する建物が客席になっていましたが、明治以降、屋根付きの舞台と付随する楽屋、客席と建物に収容され、能楽堂と呼ばれるようになりました。
昔ながらの屋外舞台も全国に数十カ所現存しています。

番組

御挨拶 朝倉 俊樹
ミニ講座 馬野 正基

能 (喜多流)

枕慈童

シテ (高き) 友枝 昭世

ワキ (物使) 殿田 謙吉
ツキツレ (後臣) 大日方 寛
ワキツレ (後臣) 梅村 昌功

後見 香川 靖嗣
中村 邦生

地謡 谷 友矩 友枝 雄人
粟谷 充雄 粟谷 明生
内田 成信 粟谷 能夫
粟谷 浩之 長島 茂

大鼓 國川 純 大鼓 親世 元伯
小鼓 曾和 正博 筋 松田 弘之

〈開演 午後二時〉

狂言 (和泉流)

文 荷

シテ 天部老 野村 万作

アド (主) 石田 幸雄
アド (実演) 深田 博治

後見 中村 修一

休憩 二十分

〈三時五十五分頃〉

仕舞 (宝生流)

嵐山

宝生 和英

地謡

大友 順
武田 孝史
高橋 亘
小倉伸二郎

仕舞 (金剛流)

半 部

金剛 永謹

地謡

工藤 寛
山田 純夫
宇高 通成
坂本立津朗

仕舞 (金春流)

天 鼓

金春 安明

地謡

山中 一馬
本田 光洋
辻井 八郎
山井 綱雄

〈四時十五分頃〉

能 (親世流)

子方 (義経) 武田 章志
ツレ (同山) 武田 友志
ツレ (同山) 坂口 貴信
ツレ (同山) 浅見 重好
ツレ (同山) 藤波 重彦
ツレ (同山) 角 幸二郎
ツレ (同山) 清水 義也
ツレ (同山) 藤波 重孝
ツレ (同山) 武田 尚浩
ツレ (同山) 山階彌右衛門
シテ (弁慶) 親世 清和

安宅

幼徒 松流之伝

ワキ (富屋) 宝生 欣哉
アイ (太刀持) 山本 則孝
アイ (旗力) 山本泰太郎

大鼓 亀井 忠雄 筋 一噌 庸二
小鼓 大倉源次郎

後見 上田 公威
木月 孚行
親世 芳伸

地謡

川口 晃平 山崎 正道
長山 桂三 武田 宗和
坂井 音雅 梅若 玄祥
坂 真太郎 岡 久広

附祝言

〈終演予定 五時四十五分〉

お願い

・場内での撮影・録音・録画は固くお断り致します。
・場内では携帯電話の電源・時計のアラーム等をお切り下さいますようお願い致します。
・出演者はやむを得ぬ事情により変更させて頂く場合がございます。予めご了承下さい。

能 枕慈童

能の文書に仕える大臣が中国の瀋陽山の麓に粟水の水脈があるのを見て、その水を見て夢れと三旨を受け山へ入ります。すると山奥に一の窟があり、中から美しい姫が現れます。勅使も慕いおぼいに山奥に居ることが不思議なので化生の者と仰し、おぼいですが、徳重は開の時代の御子に仕えていたと名乗り、しかし開の時代は既に数代前の話で七〇〇年も前であることに徳重は驚かされ、驚かされた後、早昔の思で枕に法華経の妙文を記したものであり、勅の座にうつして濡れに浮かべると華から消るし、それが不老不死の薬となり、それによって日分が七〇〇年も生き延びていると仰し、徳重は高麗の前で舞を舞い、菊水を勅使に捧げ、そのまま麻に眠ってしまいました。

狂言 文荷

主人は太郎道者、次郎道者の二人の家来を呼び出して、思いを寄せる手紙と、思ひ出の小人(少年)に宛てた文を届けるように言いつけます。奥方に叱られると、言っても主人は聞き入れないので、しびしび出かけた二人は、文を身にいれ、付合います。そのうちに一人して持つ方法を思いつきますが、奥りに思ひ文だと不審があり、中身を盗み読んでしまいます。

仕舞 嵐山

入和の四吉町から藤の西、嵐山に移住した叔の様子を見て、くのようにこの勅命を受けた帝の臣は、そこで花守の老太郎に出会います。老太郎は木守の神、勝子の神により、叔が去しく、叔と語り、自分達こそがその化身であると語り、姿を消します。
今が夜になり、男神・女神として、神が現れて、舞を舞い、王権現も出現し、春の盛りを告ぐのでした。

仕舞 半部

夏の終わりに、勅使野宮林院で花を供養する際、夕顔の花を立てる女侍が現れ、五糸廻りにおいでなさいと、言いつて姿を消します。半部は、その後、徳の後の山心の場面で、光徳氏と夕顔の目が相俣の花を仲立ちとして、山奥に、夕顔を結んだことが、夕顔の立場から、おぼいをもって、回想写真風に描かれます。

仕舞 天鼓

所は中興、大より鼓が降る体内に入る夢を見た大鼓に、生まれたい天鼓は、妙言を授かる鼓を愛するあまり、帝の命を打ち、呂水に沈められます。父の打つ鼓の音に、鼓を愛した帝は、天鼓の手向け、法要を行うと、天鼓の亡霊が現れ、鼓を打ち鳴らし舞を舞います。仕舞では天鼓の亡霊の舞の舞を演じます。

能 安宅

平家滅亡の後、義経一行は頼朝の追及を逃れるため、止伏寮となり、部を待ち、奥へ入る途次、加賀国・安宅の間にさしかかります。介が東大寺再建の密達を尋ねる山伏と名乗ると、関守の家督は怪しみ、密達を認めず、追りまします。介は有り言の巻物を御座ると、信り読み上げると、関守も一旦は信じますが、今度はお金を渡さなければ見合められず、ここで介は機転を利かせ、一行の勇ましさを関守を説き、通り抜けさせます。その後、一行が休んでいる所へ、関守が酒を樽で、非礼を詫言います。介は酒を飲まず、一行を促して旅路を急ぐのでした。介は「義経の伝」は、介が勇将を敬慕し、真の傳に感銘を受ける中、様々な変化が見られるです。